
OB 通信

2008 年 No.6

(2008.8)

全国七大学対校陸上競技大会

- ・ 悲願の男子総合初優勝
- ・ 男子投擲 4 種目で 1 位独占 男子砲丸投、男子円盤投で表彰台独占
- ・ 今泉(3)が男子砲丸投、男子円盤投、男子ハンマー投で三冠・二連覇達成
- ・ 杉本(1)が男子やり投で 63m06 の大会新記録・部記録樹立

平成 20 年度東北学連ナイター競技会

- ・ 小林(M1)、齋藤(4)、大場(2)が第 20 回出雲全日本大学選抜駅伝競走の東北学連選抜代表メンバーに内定
-

～目次～

- ・ 平成 20 年度東北学連ナイター競技会(7/26) (2 ページ)
- ・ 全国七大学対校陸上競技大会(8/3) (3～18 ページ)
- ・ 自己記録更新者一覧(7/1～8/3) (19～20 ページ)
- ・ 会計からのお知らせ (21 ページ)
- ・ 今後の予定 (22 ページ)
- ・ 編集後記 (22 ページ)

盛夏の候、会員の皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

今号では、平成 20 年度東北学連ナイター競技会(7/26)、全国七大学対校陸上競技大会(8/3)の結果をお伝えいたします。

#平成 20 年度東北学連ナイター競技会(7/26) 於 愛島陸上競技場

今年も、東北大学からは多くの部員が出場しました。男子の部の 4、5 組目以降は気温が 20 度を下回る絶好のコンディションで競技が行われ、好記録が続出しました。

女子の部の 1 組目に出場した荒木(1)と佐藤(1)は、初の 5000m のレースでした。2 組目では東北大学内の激しい争いが見られました。

男子の部の 4 組目に出場した林(4)は、高校以来自己ベストを大幅に更新し自身初の 15 分台をマークしました。さらに、6 組目に出場した川口(M1)と島田(4)も自己ベストを更新しました。7 組目に出場した小林(M1)、齋藤(4)、大場(2)がそれぞれ 15 分前後の好走で見事出雲駅伝の代表メンバーに内定しました。

例年通り好記録の連発となり、長距離パートは 1 週間後に控えた七大戦に向けて大きく勢いがつきました。

■男子 5000m

組	氏名(学年)	記録	順位
2 組	工藤 佑馬(1)	17'38"60	23 着
	中道 尚史(3)	17'49"73	24 着
3 組	相澤 直人(4)	16'23"86	9 着
	尾形 洋平(1)	16'31"88	13 着
	渡辺 貴哉(4)	16'53"89	22 着
4 組	林 亮輔(4)	15'59"35	9 着
	荒川 淳一(M2)	16'24"37	17 着
5 組	鈴木 雄輔(3)	16'13"78	19 着
6 組	島田 健作(4)	15'19"59	5 着
	川口 亮平(M1)	15'28"35	8 着
	早坂 達也(2)	15'37"55	13 着
	箭内 正輝(2)	15'46"95	18 着
	平 聖也(3)	16'28"74	27 着
7 組	大場 直樹(2)	14'55"86	5 着
	齋藤 純(4)	14'59"00	8 着
	小林 和也(M1)	15'04"42	12 着

■女子 5000m

組	氏名(学年)	記録	順位
1 組	佐藤 仁美(1)	21'14"75	14 着
	荒木佳那子(1)	23'23"84	21 着
2 組	大淵 真波(4)	18'32"25	14 着
	永井 瑞希(4)	18'33"26	17 着
	小海 麻美(2)	18'38"47	18 着

～主将挨拶～

今大会、男子は59年目にして悲願の総合初優勝を達成致しました。そして、男女総合優勝です。これもOB、OGや院生をはじめとする皆様のご協力やご声援のおかげです。暑い中でのご声援は、選手にとって大きな力となりましたし、差し入れや寄付金などでの援助は本当に助かりました。改めてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。その意味でも、この総合優勝は学部生の枠を超えた東北大学の総合力で勝ち取ったものだと強く感じています。まさに歴史に名を刻めたと思います。

主将となったこの一年間、私は常にチームというものを意識するようになってきました。目標を皆で共有し、調子の良い人は部を引っ張り、調子の悪い人は逆に引っ張ってもらえるようなチームを作ろうと目指していました。しかし、私自身主将らしい走りが全くできず、チームを引っ張れずに常に引っ張ってもらう形となってしまった大会が多かった事は今でも心残りです。また、部員との意見の食い違いなどで逆に私自身がチームの雰囲気を悪くしてしまった事もありました。しかし、七大戦前からはとても良いチームになりました。壮行会の盛り上がりや、掲示板での意気込み等も例年以上だったと思います。まとまりの無いチームだと言われていたかもしれませんが、このチームはまとまるとこんなにも強くなるのだと感激しました。

七大戦では主将らしい走りができ、最後の大会で競技において部を引っ張れた事を嬉しく思います。他の種目でも、点の取りこぼしが無く、決勝に残ってしっかり点を取ってくるという良い流れが終始ありました。東北大学のチーム力、つまり学部生だけではない東北大学全体の総合力があったからです。本当にOB、OGや院生をはじめとする皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。私が良いチームを作ったとは言えませんが、七大戦で私が目指していたチームに近付けた事はこのチームで主将をさせて頂いて本当に幸せだと感じさせてくれました。本当にありがとうございます。

私たちの代で男子初の総合優勝を経験しましたが、歴史はまだ始まったばかりです。来年は今泉新主将のもと、連覇という快挙を成し遂げてくれる事でしょう。これからのチームにOB、OGの方々も変わらぬご声援をお願い致します。本当にありがとうございました。

東北大学学友会陸上競技部主将 田中 裕志

第59回全国七大学対校陸上競技大会 対校得点

1位	東北大学	94.5点	(T25点 (6)	F 69.5点 (1))
2位	京都大学	71点	(T47点 (2)	F 24点 (3))
3位	大阪大学	68.5点	(T32点 (3)	F 36.5点 (2))
4位	名古屋大学	56点	(T48点 (1)	F 8点 (6))
5位	北海道大学	44点	(T30点 (4)	F 14点 (5))
6位	東京大学	43点	(T27点 (5)	F 16点 (4))
7位	九州大学	22点	(T22点 (7)	F 0点 (7))

第19回全国七大学女子対校陸上競技大会 対校得点

1位	北海道大学	28点	(T16点 (1)	F 12点 (1))
2位	名古屋大学	18点	(T14点 (2)	F 4点 (2))
3位	大阪大学	11.5点	(T 8点 (3)	F 3.5点 (3))
4位	東京大学	7点	(T 5点 (4)	F 2点 (7))
4位	九州大学	7点	(T 4点 (5)	F 3点 (4))
6位	京都大学	4.5点	(T 2点 (6)	F 2.5点 (6))
7位	東北大学	4点	(T 1点 (7)	F 3点 (4))

トラック

男子 3000mSC 決勝

4位 島田 健作 (4) 9'33"81
10位 箭内 正輝 (2) 10'12"44

今大会の幕開けとなったこの種目には、北大戦、宮城県選手権と自己ベストを連発してきた島田と、昨年6位の箭内が出場した。

序盤はスローペースな展開となり、1000m通過は3'16"。1000mを過ぎたところで一気にペースアップし、先頭集団は7人に絞られる。島田は先頭集団内でレースを進めるが、箭内は集団から大きく離れて9番手となり、得点が厳しくなる。島田は2000mを6'26"で通過し、一時は2番手まで上がったものの、ラスト400m目前で3番手に後退、さらにゴール直前でも後続にかわされ、4位。箭内は後半での失速が響き、10位となった。

島田は、惜しくも表彰台に届かなかったが、堅実に3点を獲得、またもや自己ベストを更新するという充実の内容であった。



写真：島田、障害を跳び越える

女子 400m 予選

1組3着 脇坂美穂子 (4) 62"79 Q
2組5着 須藤 彰子 (3) 66"21

決勝進出が確実視される脇坂と、七大戦初出場の須藤が出場した。

1組目の脇坂は、スタート直後に名大に離されるが、バックストレートでピッチを上げ、巻き返しを見せる。北大、阪大と並んでホームストレートにさしかかると、ラストは牽制しながら余裕を見せ、3着で予選を通過した。

2組目の須藤は、上位陣がスタートから飛ばす中、力みなくペースを守って前半200mを通過。200m過ぎから内側の選手に食らいつき、ホームストレートも粘り抜いて5着。

脇坂は余裕の決勝進出となり、決勝での健闘が期待された。

男子 400m 予選

1組1着 田中 裕志 (4) 49"45 Q
2組4着 高林 佑輔 (1) 50"63
3組5着 遠藤 智之 (2) 51"78

北大戦同様、田中、遠藤、高林が出場した。昨年4位で惜しくも表彰台を逃した田中に、大きな期待がかけられた。

1組目の田中は、無理する様子もなくスタートから快調な走りを見せ、トップでホームストレートにさしかかる。ラストもスピードを維持したまま1着となり、予選から好記録をマークした。

2組目の高林は、バックストレートで追い上げ、第3コーナーでもうまくスピードに乗り、先頭集団につけてホームストレートに入る。ラストも先頭集団から離さずに粘ったが、かわせず4着。

3組目の遠藤は、スタートからスピードに乗り切れず、バックストレートで内側の選手から追い上げられる。後半粘りを見せ、ホームストレートで2人かわして5着。

主将・田中の好走に、応援席は大きく盛り上がった。主将の意地がかかる決勝でのさらなる力走に注目が集まった。



写真：田中、余裕で予選突破

男子 110mH 予選

2組2着 岩崎 辰哉 (2) 15"85(-0.7) Q

3組3着 一ノ倉 聖 (2) 15"77(-0.2) q

110mHではお馴染みの一ノ倉と岩崎が出場。昨年4位の岩崎に負けず劣らず調子を上げていく一ノ倉の走りが見どころであった。

2組目の岩崎は、スタートの反応が良く、内側の名大、東大と並んで先頭争いとなる。4台目から東大に離されたが、焦ることなく7台目で名大を引き離し、2着となった。

3組目の一ノ倉は、スタートで良く反応し、東大、阪大に挟まれて先頭争い。5台目で両隣に離されるが、差を大きく広げられることなく、ラストは倒れこんで3着となった。

岩崎は復調の兆しを見せ、一ノ倉は自己ベストの好走、両者ともに決勝進出を果たした。

女子 100m 予選

1組6着 酒巻 貴子 (4) 14"33(+0.2)

2組3着 脇坂美穂子 (4) 13"71(-2.8) Q

昨年3位の脇坂と、走幅跳が本職の酒巻が出場した。

1組目の酒巻は、30m地点までは見事な前傾で一気に加速するが、40~60m地点で今一つスピードに乗り切れず、他の選手に遅れをとる。終盤は、離された焦りからか動きが硬くなり、6着となった。

2組目の脇坂は、スタートでやや出遅れたが、巻き返しを図り、落ち着いて前の選手を追う。後半もスピード感に欠ける走りであったが、ゴール直前でなんとか1人かわし、3着となった。

400mに続いて100mでも決勝進出を果たした脇坂に二種目得点の期待が膨らんだ。

男子 100m 予選

1組6着 佐藤 圭祐 (4) 11"85(-2.2)

2組5着 神林 啓人 (4) 11"50(-0.6)

3組5着 富樫 宏朗 (2) 11"43(-1.7)

信頼ある4年生の神林、佐藤に加え、ここ最近で一気に株を上げた富樫が出場した。

1組目の佐藤は、スタートの一步目で出遅れ、他の選手との差が徐々に大きくなり、6着となった。

2組目の神林は、スタートこそ良い反応を見せたものの、20m地点からの加速が今ひとつで、上位陣に離される。後半は大きなストライドでスピードダウンを食い止めるが、前の選手に届かず6着となった。

3組目の富樫は、スタート以降小刻みなピッチでうまく加速していく。しかし、中盤から上位陣に離され、ストライドが大きくなった終盤でも前に追いつくことができず、5着。

残念ながら、前評判どおり他大学との力の差は大きく、決勝進出者を出せなかった。



写真：佐藤、前を追う懸命な走り

男子 1500m 決勝

7位 齋藤 純 (4) 4'07"58

12位 早坂 達也 (2) 4'13"02

15位 相澤 直人 (4) 4'18"08

3分台に迫る記録を持つ齋藤と、部内の熾烈な選考を勝ち抜いた相澤、早坂が出場した。

400m を 68" で通過したところで齋藤、早坂が集団後方から徐々に前に出て行く。一方、相澤は集団から離れ始める。ラスト一周を迎えたところで集団は完全に崩壊し、一気にペースが上がる。齋藤は得点圏内をキープするが、先頭との差は広がる。バックストレートでは今ひとつスピードに乗れなかったが、ラスト 200m からスパートをかけ、8番手あたりから順位を上げていく。ラスト 100m で 6、7番手となり、ゴールで足がもつれて倒れこみ、大接戦の末惜しくも 7位となった。早坂、相澤は得点争いにかからむことはできなかったが、ラスト 1周はしっかりと力を出し切り、それぞれ 12位、15位となった。

わずか 0.3 秒差で 1 点を逃した齋藤は、ゴールで転倒した際のケガがひどく、続く 5000m のレースへの影響が心配された。

男子 400m 決勝

2位 田中 裕志 (4) 48"30

予選で自己ベストに迫る記録を出した田中が出場した。昨年逃した表彰台を目標に、主将の意地の見せどころとなった。

スタートから勢い良く飛び出すと、バックストレートに入ったところで早くも本命の阪大をとらえる。そのまま一騎打ちの先頭争いが続き、ホームストレートに。最後の最後まで激しく競り合ったが、ゴール直前でわずかに競り負け、2位となった。

一步及ばなかったが、東北大歴代 2 位の大記録、高校以来の自己ベスト。主将の熱い走りで、応援席には大きな歓声が上がった。

☆選手より一言

400m は短距離最初の決勝種目ですので、主将としてチームに良い流れを作る事を強く意識して走りました。予選でもチームに勢いをつけるために 1 着を狙って走り、予定通り 1 着通過で決勝に進みました。そして、決勝では自己ベストで準優勝できました。記録よりも勝負を意識していたので、レース後は最後の直線で抜かれた悔しさが大きく、自己ベストである事は後々に知りました。しかし、私の自己ベストは高校時代の 49"33 で、大学ベストは去年の七大戦での 49"96 でした。今大会でそれを大きく更新し、48"30 で準優勝する事ができ、本当に嬉しいです。4 年間のスランプをようやく抜け出し、最後の七大戦でチームに貢献できました。他の部員も私の走りを見て感動したり、涙したり、気合が入ったと言ってくれたりしました。一緒に総合優勝したいと心から思うチームに勢いをつけられた事は私の誇りです。応援して下さい皆さんに心から感謝致します。

田中 裕志

男子 110mH 決勝

3位 岩崎 辰哉 (2) 15"48(-1.4)

6位 一ノ倉 聖 (2) 15"99(-1.4)

決勝進出の勢いそのままに、ダブル得点に大きな期待がかかる中、一ノ倉と岩崎が出場した。

岩崎のスタートが鋭く、いち早く1台目に飛び込む。中盤で九大、東大に先行されるも、阪大の追撃を抑えて3位となった。一ノ倉は横一線のスタートとなる。上位4人に離されるも、終盤まで落ちない安定したハードリングを見せ、6位となった。

岩崎が表彰台に上がり、期待通りダブル得点を実現させ、充実の結果となった。

☆選手より一言

昨年より0.1秒ほど遅いタイムでしたが、昨年より1つ上の3位に入ることができました。今年の七大戦以前の大会の成績と比べると、この結果は奇跡的と言えるでしょう。シーズン序盤からの不調を断ち切れたのはOB、OGの皆様の力強いご支援があったおかげでもあります。本当にありがとうございました。しかし、そうはいつてもほかの短距離種目と比べて110mHは格段にレベルが低かったので、本当はもっと上の順位を取らなければいけなかったと思います。男子総合優勝を達成して喜ばしい反面、この点では悔しくもあります。今回の七大戦をきっかけに調子上げて、今シーズン残りの競技会でなんとか自己ベスト近くのタイムを出せるように頑張ります。そして来年の七大戦では1位をとって、東北大学の連覇に貢献したいと思います。

岩崎辰哉

女子 100m 決勝

6位 脇坂美穂子 (4) 13"54(-1.3)

400m 予選ほどの余裕はなかったものの、手堅く決勝進出を果たした脇坂が出場した。

脇坂は、スタートで他の選手に大きく離される。その後の巻き返しは良かったものの、スタートでできた差は大きく、挽回できないまま6位となった。

昨年に続く表彰台を実現することはできず、続く400m決勝に望みがかけられた。

女子 800m 決勝

9位 永井 瑞希 (4) 2'29"97

11位 小海 麻美 (2) 2'34"92

女子長距離パートのエース・永井と、3000mとの二種目出場となった小海が出場。二人にとって専門外の種目ではあるが、スタミナを生かした粘りある走りが注目された。

永井は、集団前方でスタートしたものの、200m付近から徐々に後退し、300m過ぎで集団から離脱。小海もスタート直後は集団後方につけたが、1周せずに脱落。二人とも得点争いに絡めず、永井が9位、小海が11位。

北大の只野(4)が2'13"68の大会新記録を樹立するハイレベルなレースとなったが、2人とも十分に戦えるには至らなかった。



写真：応援席の様子

男子 800m 予選

- 1組7着 寺川 亮 (4) 2'07"73
2組3着 本間 亮太 (2) 1'57"46 q
3組4着 田村 淳 (1) 1'58"15

中距離パートで1点でも獲得するという目標を掲げ、寺川、本間、田村が出場した。

1組目の寺川は、スタートでやや出遅れたが、それほど離されずに前の選手を追い、400mを60"で通過。400mを過ぎたところで前の選手から大きく離され、ラスト100mで差をつめたものの、追いつけず7着。

2組目の本間は、勢い良くスタートして集団前方で落ち着いてレースを進める。400mを58"で通過し、バックストレートでペースを上げてトップに。しかし、ラスト200mで後続につかまり、3人で先頭争いとなる。ラスト100mでは他の二人をかわそうとするも、一歩及ばず3着となった。

3組目の田村は、スタートから200mまでは5番手、400mの通過は59"で6番手となる。ここで先頭集団から離され厳しい展開となったが、バックストレートで見事に追いつく。ラスト200mからは先頭争いを繰り広げ、混戦となるがラスト100mで他の2人に先を行かれ、惜しくも3着となった。

本間は、自己ベストで見事決勝進出。この種目での決勝進出は3年ぶりであった。

男子 400mH 予選

- 1組7着 鈴木 貴幸 (2) 59"88
2組2着 柴田 智弘 (3) 57"91 Q
3組4着 加藤 聡 (4) 58"13

北大戦同様、加藤、柴田、鈴木が出場した。昨年6位の柴田をはじめとするヨンパー陣の健闘が期待された。

1組目の鈴木は、スタートから飛ばして中

盤までは先頭争いに加わるが、終盤で力尽きて7着でフィニッシュした。

2組目の柴田は、序盤から北大との一騎打ちでレースを進める。終盤で北大にリードを許すが、ラストは3番手の選手を見ながら余裕の走りで、2着となった。

3組目の加藤は、バックストレートで先頭から離されるものの、自分のペースを守って徐々に追い上げる。300mを最後尾で通過すると、そこから猛烈な追い上げで1人かわし、4着となった。

柴田が余裕の決勝進出。決勝では昨年以上の好走が期待された。

男子 200m 予選

- 1組6着 神林 啓人 (4) 23"29(-0.5)
2組3着 鈴木 一輝 (1) 22"93(-1.9)
3組7着 宇田 侑平 (4) 24"28(-1.6)

短足の4年生・神林、宇田の他、走幅跳専門の鈴木が出場した。上位陣との差を覆すことができるか、注目が集まった。

1組目の神林は、スタートから大きく離される。後半粘りを見せたものの、差を広げられないようにするのがやっとで、6着。

2組目の鈴木は、序盤から快調に飛ばす。2番手でコーナーを抜け、2~4番手争いとなるが、ラストで他の選手の追撃を受け、3着となった。

3組目の宇田は、レースが進むにつれて徐々に周りから離され、コーナー出口では最後尾。ラストも追い上げきれず、7着。

鈴木は決勝進出まであと一歩であったが、100m同様決勝進出者を出すことができなかった。

女子 3000m 決勝

6 位 小海 麻美 (2) 11'07"14

8 位 大淵 真波 (4) 11'19"90

東北インカレで二種目入賞を果たした大淵と、北大戦、ナイター陸上と徐々に調子を取り戻してきている小海が出場した。

2 人ともスタートから勢いが良く、大淵は 3 番手で第 1 集団の後方、小海は 4 番手で第 2 集団の先頭につける。1000m 通過は大淵が 3'28"、小海が 3'22"。その後、2 人ともペースが落ち、2000m 通過は小海が 6 番手で 7'13"、大淵が 7 番手で 7'18"で得点が厳しくなる。小海は粘りの走りで失速を食い止め、順位を保って 6 位となった。一方、大淵は失速を食い止めることができず、ラスト 100m で後続の選手にかわされ、8 位となった。

気温 32 度という過酷なコンディションでのレースとなり、2 人とも実力を発揮しきれなかった。



写真：大淵と小海、中盤の粘り

男子 4×100mR 決勝

7 位 東北大学 42"81

[鈴木 一輝(1)・富樫 宏朗(2)

・神林 啓人(4)・田中 裕志(4)]

前評判は厳しいものであったが、1 点でも多く獲得することが期待された。

鈴木は、名大に離されるものの他大学と横一線で張り合う走りを見せる。富樫は、他大学のエースに負けない快調な走りとなるも、バトンパスでやや詰まる。神林は、懸命に他大学との差を詰めようとするも、その差は徐々に広がってしまい、6 番手でバトンを渡す。田中は、混戦の中でバトンを受け、順位を上げようと必死で前を追うが、東大に競り負け 7 位となった。

残念ながら前評判を覆すことができず、得点を逃してしまったが、マイルリレーでの雪辱が望まれた。



写真：神林、田中へ向かって最後の追い上げ

男子 400mH 決勝

3位 柴田 智弘 (3) 54"33

短距離 PC の意地をかけて、柴田が出場した。PC の最後の仕事として、一年間の集大成となる決勝レースに臨んだ。

スタートから疲れも見せずに快調に飛ばし、5 台目までは名大、九大と先頭争いを繰り広げる。7 台目で 2 番手に上がり、ラスト 100m にさしかかる。しかし、10 台目で北大の追撃を受け、ラストは競り合いの末に倒れこんでゴールし、3 位となった。

惜しくもラストで競り負けたが、大幅に自己ベストを更新して表彰台に上がり、見事 PC の仕事を果たした。

☆選手より一言

僕がこうやってコメントを書くことなど、僕を含め誰も予想していなかったでしょう。なんとんでも 400mH、約 1.7 秒ベスト更新しての表彰台ですから。なぜこのような結果になったのか、正直今でも不思議です。ただひとつ言えることは、あのレースはすごく楽しかったということです。後先考えずに、どこまでも自分のペースで、自分のレースを。8 レーンということもあって、陸上競技の醍醐味である自分との戦いに専念できた結果だと思います。

柴田 智弘

女子 400m 決勝

5位 脇坂美穂子 (4) 63"13

余裕で決勝進出した脇坂が出場。100m の疲れを吹き飛ばすような好走が期待された。

スタートからあまり飛ばさず、抑えるレースとなる。200m までで上位 4 人には差をつけられ、得点が厳しくなる。ラストも持ち前のキレが見られなかったものの、ゴール直前で 1 人かわし 5 位となった。

残念ながら、400m でも得点を逃したが、4 年生らしい堂々とした走りを披露した。

男子 800m 決勝

5位 本間 亮太 (2) 1'59"23

予選で自己ベストを更新し、好調の本間が出場した。前評判を覆して決勝進出を果たし、この勢いで得点を上げることが期待された。

スタートはやや出遅れたが、オープンレーンになるまでにはその遅れを取り戻し、1 番手で 200m を通過。その後、3~4 番手となり、400m は 60" で通過する。バックストレートでは混戦となり、本間は 5~7 番手あたり。ラスト 100m も熾烈な得点争いとなり、最後までまったく読めない展開となる。本間はラストも切れずにしっかりと粘り、5 位となった。

2 点を獲得して見事中距離パートの目標を達成した。800m では 3 年ぶりの得点となった。

男子 5000m 決勝

9 位 大場 直樹 (2) 15'43"20
10 位 齋藤 純 (4) 15'49"13
18 位 平 聖也 (3) 17'08"83

長距離パートの二大エース・齋藤、大場と、PCの平が出場した。齋藤と大場のダブル表彰台も夢ではなく、大量得点が期待された。

1000m 通過が 3'08"~3'10"と、序盤はスローペースで牽制するレースとなる。2000m 目前で平が遅れ始めるが、齋藤と大場はしっかりと集団につける。3000m 通過は齋藤が 5 番手、大場が 10 番手となり、9'30"前後で通過。厳しい暑さのため、給水も欠かせない。その後、4000m 目前で齋藤、大場ともにペースアップした集団から離され、得点が遠のく。平は大きく失速し、非常に苦しい展開に。大場 9 番手、齋藤 10 番手で迎えた終盤では、2 人ともいつものキレを見せることができず、順位を上げられないままそれぞれ 9 位、10 位となった。平は暑さにやられたのか失速を抑えられず、18 位となった。

厳しいコンディションの下、七大戦特有の駆け引きが難しいレースとなった。実力では得点どころか表彰台も狙えていただけに、非常に悔やまれる結果となった。



写真：齋藤と大場、集団内での駆け引き

女子 4×100mR 決勝

4 位 東北大学 52"77
[飛内 茜(3)・菊地 亜加里(3)

・脇坂 美穂子(4)・酒巻 貴子(4)]

脇坂、酒巻ともに、個人では逃した表彰台を目指し、女子の最終種目で有終の美を飾るべく臨んだ。

飛内は、スタートは良かったものの後半の伸びが今ひとつで、4 番手争いの中でバトンを渡す。菊地は、抜群の加速を見せて前との差を一気に詰め、3 番手争いを繰り広げる。脇坂は、鋭いピッチでコーナーを抜け、2 番手に順位を上げてバトンを渡す。酒巻は、スムーズな滑り出しを見せるものの、後続にかわされたところで硬くなり、ゴール直前でも 1 人にかわされ 4 位となった。

惜しくも表彰台に上がることはできなかったが、大きな 1 点を獲得した。



写真：脇坂から酒巻へ、バトンパスの瞬間

男子4×400mR 決勝

1位 東北大学 3'18"57

[高林 佑輔(1)・柴田 智弘(3)

・遠藤 智之(2)・田中 裕志(4)]

前評判は厳しかったが、田中と柴田が個人で表彰台に上がって乗りに乗っていることから、この種目でも表彰台に上がる勢いが感じられた。

高林は、スタートから軽やかに好走し、ラストもうまくまとめて2番手争いでバトンを渡す。柴田は、第3コーナー手前で一度3番手となるが、ホームストレートで一気に抜け出し、先頭でバトンを渡す。遠藤は、抜群のタイミングでバトンを受け、完全に抜け出す。前半で勢い良く加速したものの、後半で失速し、3番手でいよいよアンカーの田中へ。田中は、バトンを受けた直後から猛烈に前を追い、バックストレートで一気に北大をかわすと、第3コーナーでは差のあった九大をもとらえ、その後もまったく衰えることなく勢いそのままに1位となった。

見事に奇跡が起きた。まったく負ける気がしない勢いがあった。応援席は感動の嵐だった。歴史的な瞬間を目にすることができ、本当に感無量のレースであった。

☆選手より一言

マイルリレーの結果に関係なく、男子の総合優勝は確実なものとなっていました。 「総合優勝にマイルリレー優勝で華を添える」事を強く意識していました。レース前は、私が主将として走る最後のレースだという事を強く思いながら、皆に最後の主将の走りとはどんなものなのか見せてやろうじゃないかと熱くなっていました。そして、高林と遠藤には、俺が最後にいるから安心して自分のレースをして来いと、柴田には、400mH

での好調をこのマイルでも維持するようにと、レース前にメンバーの皆に声をかました。

レースは常に先頭集団を死守し、私には先頭と20mも差がない好位置でバトンが渡ってきました。走り出した瞬間、400mより身体が動き、前の選手が止まって見えるほど好調でした。200m通過でトップに立つと、そのまま皆の声援を受けながら逃げ切り、ゴールした後は感無量でしばらく立ち上がりませんでした。自分のラップも47"49と自己ベストで、チームでも3'18"59と大幅なシーズンベストでした。そして、何よりこのメンバーで勝てた事が本当に嬉しかったです。前評判を大きく覆し、皆で勝ち取った優勝は最高の「華」だと感じました。応援して下さいた皆さんに心から感謝致します。

田中 裕志

短距離PCとして、力を入れてきたマイルでの勝利は本当にうれしかったです。最終種目ということもあり、まさに歴史に名を刻んだ瞬間だと思います。また、この歴史的なレースのメンバーでいられたことを誇りに思います。最高の3分18秒でした。

柴田 智弘



写真：マイル優勝！

跳躍

女子走高跳決勝

3位 菊地亜加里 (3) 1m45

跳躍 PC・菊地のみのお出場となった。表彰台は堅く、実力どおりの跳躍が期待された。

1m35、1m40 を難なくクリアし、大学ベストである 1m45 に挑戦する。1、2 回目ともに惜しいところで失敗するが、3 回目で見事クリアし、表彰台を確保した。1m48 は踏み切りのタイミングが合わずに失敗し、3 位となった。

跳躍最初の種目で見事に表彰台に上がり、跳躍パートに勢いをつけた。

☆選手より一言

練習ではあまり調子が良くありませんでした。1m35 すら跳べるのかという心配もありましたが、ただ負けるわけにはいかないという意気込みで今回の七大戦に臨みました。

想像以上にレベルが高い争いで、1m40 をクリアした人も何人かおり、表彰台が厳しい状況に追い込まれました。そんな中で、3000mSC の島田さんの走りを見て感動し、自分も続いていこう、そう思えました。すると、最初はトラックに集中していた応援がフィールドにも向き、「あかり一本！」という声援に押され、1m45 をクリアすることができました。表彰台に上がることができたのはみんなのおかげだと思えた瞬間でした。

自分の跳躍はまだまだ発展途上です。特に高いバーに跳び慣れていないためか、高くなると自分の悪い癖ばかりが出てうまく跳べなくなってしまうます。来年の七大戦では、さらに上位と戦える力をつけて臨んでいくので期待しててください。

菊地 亜加里

男子棒高跳決勝

1位 白井 孝明 (3) 4m50

9位 橋本耕太郎 (4) 3m90

10位 藤澤 鐘吾 (4) 3m70

昨年 2 位の白井、6 位の橋本、自己ベストを更新したばかりの藤澤が出場した。他大学の下級生が強く、混戦が予想された。

藤澤は 3m50 から始め、3m70 をギリギリの高さでクリアし、自己ベストタイの 3m80 に臨む。しかし、一回目の試技で足が合わず、その後の試技もパスし、10 位となった。

橋本も 3m50 から始め、自己ベストタイの 3m90 まで順調にクリアすると、いよいよ 4m00 に挑戦する。しかし、3 回とも高さが足りず、9 位となった。

白井は 4m00 から始め、一発でクリア。4m00 を 7 人がクリアするというハイレベルな争いとなったが、そんなことはお構いなしに 4m50 までの試技を全て一発でクリアし、見事 1 位となった。

昨年は優勝を逃した白井が、今年はしっかりと優勝を勝ち取った。しかし、全体のレベルが高く、橋本、藤澤が得点を逃してしまったことが悔やまれた。



写真：橋本、助走の瞬間

男子走幅跳決勝

- 1位 藤澤 鐘吾 (4) 7m15(+2.0)
5位 鈴木 一輝 (1) 6m98(+1.3)
14位 落合 裕規 (3) 6m06(+1.4)

7mジャンパーの藤澤、鈴木の他、最近自己ベストを連発している落合が出場した。

落合は、1回目はファールとなったが、2回目に6m06(+1.4)を記録し、感触をつかむ。しかし、3回目に記録を伸ばすことができず、14位となった。

鈴木は3回目に6m98(+1.3)、藤澤は2回目に7m15(+2.0)とそれぞれ好記録をたたき出し、ベスト8に進出。その後2人とも記録を伸ばせなかったが、前半で出した記録で藤澤が1位、鈴木が5位となった。

藤澤は自己ベストを更新して優勝し、貫禄を見せつけた。

☆選手より一言

走幅跳では、ようやく表彰台の頂点に立てました。唯一、大学でのベスト更新がなかった種目でしたが、それも達成できました。外部の方にアドバイスをいただいたことが好結果につながりました。ただ、部記録に10cm届かなかったのは少々心残りです。砲丸投と円盤投は共に3位でしたが、念願のレンジャー表彰台独占は達せられたので、大満足です。表彰式は3種目とも、本当に幸せでした。他に出場した4種目でも、自分が表彰台に立てずとも若い力の台頭があったので、それで良しとしようと思います。

最後の年にして、最高の思いをさせていただきました。東北大陸上部に感謝します。

藤澤 鐘吾

女子走幅跳決勝

- 4位 菊地亜加里 (3) 5m17(+2.3)
9位 星 朝香 (3) 4m67(+1.5)

ここ最近自己ベスト更新者が続出しているこの種目に、菊地と星が出場。走高跳に続いて表彰台に上げられるかに注目が集まった。

星は、1回目に自己ベストとなる4m67(+1.5)の跳躍を見せる。しかし、その後の試技で記録を伸ばすことができず、1cm差でベスト8進出を逃し9位となった。

菊地は、2回目に5m04(+0.4)、3回目に5m06(+1.1)と安定して5m台の跳躍を見せる。その後、最終試技で追風参考ながら5m17(+2.3)を記録し4位となった。

菊地は表彰台に1cm届かず、非常に悔やまれる結果となった。しかし、自己ベストで1点を獲得し、跳躍PCの意地を見せた。

男子走高跳決勝

- 4位 岡本 聖司 (4) 1m90
5位 齋藤 達 (1) 1m85
6位 藤澤 鐘吾 (4) 1m80

昨年2位の藤澤、3位の岡本に加え、2mジャンパーの齋藤が出場した。棒高跳同様、他大学の下級生が強豪であった。

藤澤は1m75、1m80を余裕でクリアするも、1m85でつまずき、阪大と並んで6位。

齋藤は1m80から始め、1m85も難なくクリアするものの、1m90は失敗。本領発揮といわずに5位となった。

岡本は齋藤と同じく1m80から始め、1m85も落ち着いた助走で楽々とクリア。続く1m90を2回目でクリアし、自己ベストを更新したが、1m95は跳べず4位となった。

岡本は惜しくも表彰台に上げられなかったが、3人とも得点でき、堅実にまとめた。

男子三段跳決勝

3位 瀧澤 翔太 (2) 14m31(+0.1)

6位 齋藤 達 (1) 13m64(+0.4)

12位 藤澤 鐘吾 (4) 12m98(-0.6)

藤澤、瀧澤、齋藤と14mジャンパーが3人そろい、最強の布陣で臨んだ。

藤澤は、助走でも踏み切りでもいつもの力強さが見られず、ベスト8進出を逃して12位。

齋藤は、なかなかタイミングが合わない跳躍となるが、手堅くベスト8進出を決める。しかし、4回目以降の試技で記録を伸ばすことができず、6位となった。

瀧澤は、力強い助走と踏み込みを見せた3回目に14m03(+1.4)を記録し、3番手でベスト8に進出。その後、5回目に14m21(+1.1)、6回目に14m31(+0.1)と記録を伸ばしたが、順位は変わらず3位となった。

瀧澤が大学ベストを大幅に更新して表彰台に上がった。次期跳躍PCの今後に大きな期待が寄せられる結果となった。



写真：藤澤、跳躍の瞬間

投擲

男子円盤投決勝

1位 今泉 卓真 (3) 35m96

2位 菊地 晃一 (4) 35m54

3位 藤澤 鐘吾 (4) 35m54

昨年1位の今泉、3位の藤澤に加え、今季ランキング1位の菊地が出場した。

もはや、向かうところ敵なしといった展開であった。3人とも3投目までで35m台の記録を出し、4位以下を大きく放す。今泉と藤澤は前半で出した記録でそれぞれ1位、3位となった。菊地は4投目で35m54を記録し、記録では藤澤に並び2位となった。

4位以下に4m近くの差をつけ、そのうえ表彰台を独占する完全勝利となった。

男子砲丸投決勝

1位 今泉 卓真 (3) 12m25

2位 菊地 晃一 (4) 11m75

3位 藤澤 鐘吾 (4) 11m52

円盤投同様、菊地、藤澤、今泉が出場した。円盤投ほどではないものの、表彰台独占の可能性は十分にあった。

今泉は、3投目に12m25を記録して他の選手に大きく差をつけると、そのまま出場選手中唯一の12m台で1位となった。

菊地は、3投目までは10m台の記録にとどまったが、5、6投目でグンと記録を伸ばし2位となった。

藤澤は、3投目の9m99でギリギリベスト8に進出すると、4投目に11m52を記録し、4位とわずか2cm差で3位となった。

僅差ではあったが、またもや東北大で表彰台を独占し、総合優勝に大きく貢献した。



写真：投擲レンジャーで表彰台独占！

男子やり投決勝

- 1位 杉本 和志 (1) 63m06(大会新記録)
 8位 藤澤 鐘吾 (4) 50m19
 16位 落合 裕規 (3) 39m89

昨年7位の落合、9位の藤澤に加え、絶対的なエース・杉本が出場した。杉本の大会新記録・部記録樹立に大きな期待が寄せられた。

落合は30m台の記録にとどまり、ベスト8は遠く16位となった。

藤澤は50m19の7番手でベスト8に進出したが、その後記録を伸ばせず8位となった。

杉本は1投目60m91、2投目60m21と安定して60mオーバーを記録し、1番手でベスト8に。そして、5投目に大会新記録・部記録となる63m06を記録し、見事1位。

他大学の強豪を押しよけ、杉本が1年生にして堂々の優勝を果たした。



写真：杉本、部記録樹立の一投

女子砲丸投決勝

- 9位 菊地亜加里 (3) 7m10
 12位 酒巻 貴子 (4) 6m57

昨年3位の菊地と、走跳投で活躍する酒巻が出場した。

酒巻は3投目で自己ベストにあと1cmのところを迫る6m57を記録したが、ベスト8には及ばず12位となった。

菊地はいつもの投擲が見られず、7m10にとどまって9位となった。

表彰台も期待された菊地がベスト8に進出できなかったのは誤算であったが、2人が大会新記録を出すハイレベルな争いだった。

男子ハンマー投決勝

- 1位 今泉 卓真 (3) 45m40
 4位 佐藤 敬直 (4) 38m15
 10位 菊地 晃一 (4) 28m64

昨年1位の今泉、3位の佐藤に加え、円盤投と砲丸投で好調だった菊地が出場した。今泉にとっては三冠・二連覇がかかる重要な勝負となった。

菊地は専門外の種目だけに苦戦し、30mオーバーとならずに10位となった。

佐藤は3投目の36m56でベスト8に進出し、後半では40m台の記録が期待されたが38m15とわずか2cm差で表彰台を逃し、惜しくも4位となった。

今泉は1投目に44m70、2投目に44m82と他の選手を寄せつけないまま1番手でベスト8に進出し、最終投擲の45m40で堂々の1位となった。

プレッシャーをはねのけ、今泉が三冠・二連覇を達成した。主将就任を前にして、しっかりと大きな結果を残してくれた。

※応援に来てくださったOB・OGの方々(敬称略)

小野寺純雄 小野厚夫 伊藤弘昌 浅野宣彦 宮崎鉄男 小笠原卓 金尾義則 佐藤源之
渡辺実 園盛之介 平原雄一 眞山隆徳 二瓶薫子 城戸隆 大原綾 遠藤正淑 三浦得雄
橋本伸二 小林徳彦 岩松正記 木場今日子 志賀慎治 彦坂幸毅 須山賢也 星野清
伊藤繁和 久保正樹 和泉俊介 武康彦 久保敦子 大塚祐治 葛西陽介 泉水宏臣
開井康文 根本昇 武田一彦 古田弘毅 山口能史 神谷尚秀 會津むつみ 石原武雄
大石卓司 齋藤健太 八巻裕一 桂雅宏 上原準之助 工藤圭 佐藤道由 鈴木鋭二
五十嵐哲 今野陽介 角田康宏 小林耕士 金子秀明 橋本拓也 藤木康代 植木洋輔
岡秀行 大森圭祐 斉藤陽 鶴石楽 丸田聡 佐々木ひとみ 諸白家奈子 山崎裕太郎
渡辺美和 渡部佑一 奥津多加志 小平圭一 飛田雄一 西川漠 橋本英明 橋本由香里
畑山峻 細川淳一 渡辺翔太郎 荒川淳一 鈴木義教 永橋浩二 野崎莉代 松本洋
山内英樹 依田典朗 青柳光裕 五十嵐さやか 稲葉清文 川口亮平 小林和也 齋藤春恵
菅井裕之 中嶋啓太 中島大 長谷川翔平 原田貴正 藤川誠 山本剛史 八木洋光
吉田愛子

この他にも、多くのOB・OGの方々が応援に来てくださいました。全員のお名前を把握しきれず、申し訳ありませんでした。また、たくさんの差し入れもいただき、ありがとうございました。



写真：OB・OG、閉会式後の宮城野のスタンドにて

#自己記録更新者一覧(7/1~8/3)

<男子>

・100m

一ノ倉 聖(2)	11"78(±0.0)	(8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
鈴木 一輝(1)	11"41(±0.0)	(8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
富樫 宏朗(2)	11"43(-1.7)	(8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

・200m

鈴木 一輝(1)	22"93(-1.9)	(8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
----------	-------------	-------------------------

・400m

中嶋 啓太(M1)	50"01	東北大歴代 19位 (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
望月 明人(3)	52"05	(8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
田中 裕志(4)	48"30	東北大歴代 2位 (8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

・800m

本間 亮太(2)	1'57"46	東北大歴代 12位 (8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
----------	---------	-----------------------------------

・1500m

齋藤 純(4)	4'00"36	東北大歴代 8位 (7/13 第63回福島県陸上競技選手権大会)
川口 亮平(M1)	4'01"61	東北大歴代 10位 (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
林 亮輔(4)	4'24"76	(8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

・5000m

川口 亮平(M1)	15'28"35	(7/26 平成20年度東北学連ナイター競技会)
小林 和也(M2)	15'04"42	東北大歴代 16位(7/26 平成20年度東北学連ナイター競技会)
島田 健作(4)	15'19"59	(7/26 平成20年度東北学連ナイター競技会)
林 亮輔(4)	15'59"35	(7/26 平成20年度東北学連ナイター競技会)
大場 直樹(2)	14'55"86	東北大歴代 10位(7/26 平成20年度東北学連ナイター競技会)

・110mH

一ノ倉 聖(2)	15"77(-0.2)	東北大歴代 17位(8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
----------	-------------	----------------------------------

・400mH

柴田 智弘(3)	54"33	東北大歴代 8位(8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
----------	-------	---------------------------------

・3000mSC

島田 健作(4)	9'33"81	東北大歴代 6位 (8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)
----------	---------	----------------------------------

・走高跳

岡本 聖司(4) 1m90 東北大歴代 11位(8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

・走幅跳

落合 裕規(3) 6m36(-0.1) (7/12 第63回宮城県陸上競技選手権大会)

原田 貴正(M1) 5m45(+0.3) (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

染谷 拓(4) 6m01(+0.3) (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

岩崎 辰哉(2) 6m26(+0.5) (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

富樫 宏朗(2) 5m32(+1.6) (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

藤澤 鐘吾(4) 7m15(+2.0) 東北大歴代 2位(8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

・やり投

遠藤 智之(2) 36m34 (8/2 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

杉本 和志(1) 63m06 部記録 (8/3 第59回全国七大学対校陸上競技大会)

<女子>

・100m

菊地亜加里(3) 13"33(±0.0) 東北大歴代 7位(8/2 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

須藤 彰子(3) 14"67(±0.0) (8/2 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

・400m

須藤 彰子(3) 66"21 東北大歴代 16位(8/3 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

・800m

小海 麻美(2) 2'34"92 東北大歴代 17位(8/3 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

・走幅跳

酒巻 貴子(4) 4m37(+0.8) 東北大歴代 17位(8/2 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

飛内 茜(3) 4m44(±0.0) 東北大歴代 15位(8/2 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

菊地亜加里(3) 5m06(+1.1) 東北大歴代 5位 (8/3 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

星 朝香(3) 4m67(+1.5) 東北大歴代 13位(8/3 第19回全国七大学女子対校陸上競技大会)

・三段跳

野崎 莉代(M2) 9m90(+0.9) 東北大歴代 3位 (7/13 第63回京都陸上競技選手権大会)

#会計からのお知らせ

七大戦ご寄付お礼のこと

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたびは、七大戦の宮城開催にあたり、たくさんのご寄付を頂戴致しましたこと誠に有り難く、深く感謝申し上げます。

また、当日にも多くの先輩方にご足労いただき、応援や差し入れなど、皆様のご厚意があったおかげで、東北大学初の総合優勝を成し遂げることが出来ました。

頂いたご寄付金の一部は、練習器具費等に充て、さらなる飛躍の為に有効に使わせて頂きたいと存じますので、今後とも何卒よろしくご支援を賜りますようお願い申し上げます。

略儀ながら書中をもってお礼申し上げます。

敬具

東北大学学友会陸上競技部会計 阿部佑亮

#今後の予定

- 8月15、16日 第30回北日本学生陸上競技対校選手権大会（新潟市営）
- 9月12～14日 天皇賜杯第77回日本学生陸上競技対校選手権大会（国立）
- 9月23日 第16回東北学生駅伝対校選手権大会（白鷹）
- 9月26～28日 第23回国公立23大学対校陸上競技大会（静岡草薙）
- 10月未定 OB戦（評定河原）
- 10月13日 第20回出雲全日本大学選抜駅伝競走（出雲）
- 10月17、18日 第59回東北地区大学総合体育大会陸上競技（福島県営あづま）

東北学生駅伝対校選手権大会は、例年通り9月23日の開催となります。長距離パートは8月12日に夏合宿を終え、選手選考も大詰めとなってまいりました。国公立戦は、東京外語大学を含めて今年から23大戦となり、静岡県草薙競技場にて開催されます。OB戦は、昨年同様10月開催となります。日程が決まり次第、早急にお知らせいたしますので、もうしばらくお待ちください。

#編集後記

今号では、東北学連ナイター競技会と全国七大学対校陸上競技大会の結果をお伝えして参りました。観戦記の執筆と写真の提供にご協力いただいたOB・OGの方々には、この場を借りて御礼申し上げます。また、発行までに時間を要してしまったこととお詫び申し上げます。

七大戦では男子が史上初の総合優勝を成し遂げ、現役部員からOB・OGの方々まで、東北大学陸上競技部がひとつにまとまって喜びを分かち合うことができ、本当に幸せでした。また、そんな歴史的瞬間をこうしてOB・OGの方々に伝えられる立場にあることが、ものすごく偶然に感じられて仕方がありません。拙い文章ではございますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

さて、次号のOB通信からは次の代の副務が担当することになります。今年より新しく始めたOB通信の電子メール配信も順調に行うことができ、現在は約270名の方々に電子メールでの配信を行っております。これも皆様のご協力のおかげであり、大変感謝しております。今後も、電子メールでの配信は継続させていただきますので、よろしく願いいたします。この一年間、副務の仕事を通して学べたことは数多く、このような機会を与えられたことに深く感謝いたします。至らない部分が多々ございましたが、あたたかく見守っていただき本当にありがとうございました。今後とも東北大学陸上競技部をよろしく願いいたします。

文責 副務 鈴木 雄輔